

試験管内凝固による D ダイマー偽高値が疑われた 1 症例

○高嶋理沙、川田未奈、山中恵、土谷弘志、横山祥恵、富來まゆみ、平原賢次
(社会保険田川病院・検査課)

【はじめに】

D ダイマーは FDP とともに、血栓性疾患の診断、経過検査に欠かせない検査として汎用されている。特に静脈血栓塞栓症の除外診断を目的とした D ダイマー検査の増加が著しい。

しかし、採血時の組織液の混入など偽高値に注意が必要である。今回は試験管内凝固による D ダイマー偽高値が疑われた症例を経験したので報告する。

【症例】

70 代女性、他院入院中転倒し左股関節受傷、当院にて左大腿骨頸部骨折と診断され入院となった。手術で人工骨頭置換術を行った。

【検査結果】

手術 6 日後、血液検査を実施した。

(血液検査)

TP 5.2g/dL、ALB 2.3g/dL、A/G 0.79、
AST 121U/L、ALT 194U/L、LD 279U/L、
T-BIL 0.7mg/dL、 γ -GT 23U/L T-CHO 183mg/dL、
UN 17.6mg/dL、CRE 0.54mg/dL、CRP 1.95mg/dL
WBC $7.15 \times 10^3 / \mu\text{L}$ 、RBC $3.82 \times 10^6 / \mu\text{L}$ 、
HGB 11.7g/dL、PLT $327.0 \times 10^3 / \mu\text{L}$

D ダイマー 74.1 $\mu\text{g/mL}$

〔リアスオート・D ダイマーネオ：sysmex〕

D ダイマーが高値だったため、翌日深部静脈血栓症 (DVT) 精査目的で下肢静脈超音波検査を実施したが、両側とも下肢深部静脈に明らかな血栓を認めなかった。

その後主治医の了承の元、エコー検査後に採血を行い D ダイマーの再検査を実施した。

初回検体 (以下検体 A) : 74.1

⇒翌日再採血検体 (以下検体 B) : 11.2

D ダイマーの数値に大幅な減少が見られ、検体 A の採血管を確認したところ肉眼的には明らかな凝集はなかった。検体 A の採血を行っ

た看護師に聞き取りをしたところ、採血に時間を要したとのことだった。

また、D ダイマーは 2~8°C で保存し採血当日中に速やかに測定しなければならないが、確認のため 24 時間室温放置した検体 A・B の D ダイマーを測定した。

検体 A : (遠心直後) 74.1 ⇒ (24 時間後) 131.2

検体 B : (遠心直後) 11.2 ⇒ (24 時間後) 11.7

【考察】

検体 B に対し、検体 A の 24 時間後の D ダイマーの数値が増加していることから、試験管内で凝固・線溶反応が起こっていたと考えた。

今回肉眼的に凝血塊が認められず、D ダイマーの前回値や PT・APTT などの検査がなかった点から偽高値と判断することが困難であった。

当院ではこの症例より以前に D ダイマー偽高値が疑われる患者がいた。心肺停止で搬入された患者で D ダイマーが高値であった。当日中に転院し、翌日には転院先の病院で D ダイマーを測定したが当院の数値に比べ大幅に減少していた。

これらの症例を経験し試験管内凝固が起こったとき、冷蔵状態で放置した検体の D ダイマーの数値を調査した。D ダイマー高値の検体を集め、遠心直後と冷蔵で放置した検体の数値を比較した。しかし、今回の症例と同様の数値の変動を示す検体はなかった。

検査結果を報告する前に他の検査結果との比較や、臨床情報と合致するかを確実に確認するべきである。もし偽高値を疑う場合は PT・APTT などを測定してみることも判断材料の一つになり得る。

また臨床側にも再採血を依頼する際に、採取時の注意点を伝えることも重要だと考える。

【連絡先】 0947-44-0460 (内線 2261)